

「これからの文化行政検討会議」における意見について

▼第1回これからの文化行政検討会議（10月5日）

■京都の文化について

- ・ 京都の文化力が生まれた背景には森林文化、木の文化があり、その点を条例に加えてはどうか。

■新たな文化の創造について

- ・ 京都には芸術家を刺激する場所、自然環境、芸術文化環境があり、国内外の芸術家の創造の場としての可能性がある。

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・ 文化の発信だけでなく、文化を受け継ぐ子ども達の感性を育てていく取り組みが必要。

■幅広い文化の振興と様々な関連分野との連携について

- ・ 5年前と比べて京都は大変国際化したが、「ほんまもん」を守る人がいるからこそ、和の文化の窓口としてコスプレのようなレンタル衣裳も成り立ちうるので、それをどう方向付けるか難しい。
- ・ 文化と経済の両輪のビジネスモデルに関心を示す若手起業家は首都圏にも多くいるので、そういう若い人の力が文化政策に生かせるのではないか。

■どこでも誰もが文化活動を行える環境づくりについて

- ・ 障害者芸術を福祉分野として扱うのではなく、私たちが惹きつけてやまない文化芸術として、環境整備や人材育成など多様な取組を進められたい。
- ・ 障害者、高齢者が文化活動に参加するためには施設のハード面の改修が必須。
- ・ 地方では少子高齢化が進み、この5年でアマチュア文化は大変疲弊しており、その克服が最大の課題である。
- ・ 今後は府内の地域文化の振興がポイントであり、キーワードとしてDMOや日本遺産をどう盛り込むかが重要。海の京都、森の京都、お茶の京都、竹の里乙訓の考えを活かし、それを広げ、つなげてほしい。
- ・ 文化庁の京都移転を控え、地域文化創生は今後も大きな柱となると思われるが、京都が文化に関してリーダーシップをもって様々な提言をしていくことは必要であるが、京都も地域の一つであるという謙虚な気持ちも必要。

■文化施策を推進する基盤づくりについて

- ・ 戦後建設された美術館・博物館は施設の更新時期に来ており、これを機に文化芸術を具体的に感じられる場として、人や物の多様な交流の形を考えたい。

▼文化芸術の保存・継承・創造ワーキンググループ（10月25日）

■文化の保存・継承について

- ・文化の「活用」だけに走るのではなく、地域に根付いた生活や暮らしを育み、地域にきちんと暮らすということをもう一度見直す必要がある。

■新たな文化の創造について

- ・時間をかけてじっくりとふれあったときに化学反応は起こるので、異分野とふれあう機会を大小限らず様々な形で用意することが重要。

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・生活文化の継承のためには、家庭の中でしっかりと伝えていくことが重要。家庭、地域、行政の連携が必要。
- ・地方から京都に学びに来る大学生に伝統文化を伝えていくことが効果的ではないか。
- ・学生は新しい技術にも詳しく、伝統文化と結びつけて新たな文化の創造にもつながる可能性がある。
- ・外国語を習得しても自国の文化を知らなければ話す中身がない。海外に出て行く人のための日本文化を教える講座があってもおもしろい。
- ・子ども達ばかりでなく、その親世代をターゲットに文化を伝えていくことが重要。

■どこでも誰もが文化活動を行える環境づくりについて

- ・地域の人たちが、自分たちの力で活動していくことを支えてあげる仕組みを作らないといくらお金や人を出しても無駄になる。
- ・若者の文化とか高齢者の文化とか分断されるのではなく様々な世代やバックグラウンドをもった人が文化を軸に補完し支えあうようなあり方が提案できないか。

■その他

- ・文化は継続が重要で一朝一夕には成果が出ない。一回のイベントで終わらない永い努力と継続をお願いしたい。
- ・様々に取り込まれているイベントの事業ごとの連携を考えてほしい。

▼文化芸術の活用と他分野連携ワーキンググループ（10月30日）

■文化の保存・継承について

- ・文化遺産の活用が国主導で行われているが、日本の木造建築は活用ばかりしていると潰れてしまう。保存のための議論が必要である。

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・京都は最先端の技術やコンテンツにも特色があり、それを活かしてデジタル絵本など最先端の技術を使った子ども向けのワークショップコレクションにもぜひ取り組んでほしい。

■幅広い文化の振興と様々な関連分野との連携について

- ・料理業界では、大学や専門学校で食に関する様々な学科が立ち上がり、マネジメント力をもった人材育成が進んでおり、今後は料理屋から新たなビジネスモデルによる成長産業に変わっていく可能性がある。
- ・和食がユネスコ無形文化遺産に登録され現在の状況になるまで10年かかっている。伝統産業や伝統芸能も世界との相互交流を続けることで、海外からも評価されるようになるのではないか。
- ・「和食」が世界に認められるようになったプロセスは重要な京都モデルであり、それを他の分野に伝搬するメソッドにすることは産学連携で行う必要がある。
- ・京都のブランドを求めて多くの食関係の企業が京都に進出しようとしており、そのような企業と連携することで、国内や海外マーケットへの波及も期待できる。
- ・コンテンツの世界では、京都は伝統ある映画だけでなく、アニメやゲームなど最先端の分野でも注目されており、そうした先端の攻めの文化にもしっかりと光を当ててほしい。
- ・東京で進められているコンテンツとテクノロジーの特区づくりに京都と直結することで、新しい文化の創造や発信につながるのではないかと思う。

▼文化芸術による共生社会実現ワーキンググループ（10月26日）

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・子どもの頃に古典を暗唱するなど文化の基礎をしっかりと作る取り組みが必要であり、府内各地で朗唱大会を実施してほしい。

■どこでも誰もが文化活動を行える環境づくりについて

- ・地域での文化事業は、イベント型から参加型、育成型にシフトしていかないと、地域文化活動に若い人、子育て世代が入ってこなくなる。

■文化施策を推進する基盤づくりについて

- ・府としては、広域振興局や府内の京都市と連携し、文化の力を京都市以外に広げて行くための丹後や中丹等でのモデルプロジェクトを考えていくべき。

▼人材育成と推進体制検討ワーキンググループ（10月24日）

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・幼稚園と美術館が連携して、休館日等に幼稚園児が一日中美術館を楽しめる取り組みを行うことは、長い目で見ると大変効果がある。
- ・修学旅行生が寺社や文化施設に来ても、京都の地元の子どもが訪れていない状況があり、子育てパスポートのような取り組みを寺社や文化施設に拡大できないか。
- ・学校の美術の授業は、京都にたくさんある神社仏閣や美術館・博物館と連携して、ほんまもんを見て感動できる体験にしたほうがよい。
- ・高校生伝統文化フェスティバルで全国各地から代表が京都に集まってくるが、京都の高校でも、もう少し伝統芸能の教育ができないか。

■どこでも誰もが文化活動を行える環境づくりについて

- ・ 祭りは地域文化の象徴であり、その振興にぜひ取り組んでほしい。

■文化施策を推進する基盤づくりについて

- ・ 寺社や文化に理解のある人たちが、金銭面で文化に貢献できるように、国内外から寄付を受けられる財団を設立できないか。
- ・ 地方の企業経営者等が文化の新たなパトロンなるという動きを広げて行く必要がある。
- ・ 美術館・博物館では、学芸員が様々な見方で収蔵品の展示に工夫を行っている。入館者数以外に展示の内容について評価、支援していくことが必要。

▼個別ヒアリング（10月31日、11月7日）

■次世代の文化の担い手の育成について

- ・ ものづくりの伝統を継承するため、情熱をもった若者が自身の能力を向上させるために、労働時間以外に制作に取り組める柔軟な環境づくりができないか。
- ・ 理系と同様に、伝統産業の分野でも大学と企業が連携を深め、大学内に企業の工房を設置するなど、革新的な技術の習得や開発など新たなプログラムが組めないだろうか。
- ・ 今は定年退職者が地域の文化を支えている状況であるが、20年後を考えると次世代の育成に集中的に文化予算を投資すべきではないか。

■文化施策を推進する基盤づくりについて

- ・ 地域の文化的格差の拡大は全国的な状況であり、今後10～20年先を見据えると文化においても選択と集中が必要である。全てを残すことはできないので、或るものは消えていくことを前提に今から準備をしておくべき。
- ・ 文化の発展にはある程度の集積が必要で、京都市以外にも何らかの形で文化施設や大学などの核を作っていくことが必要ではないか。